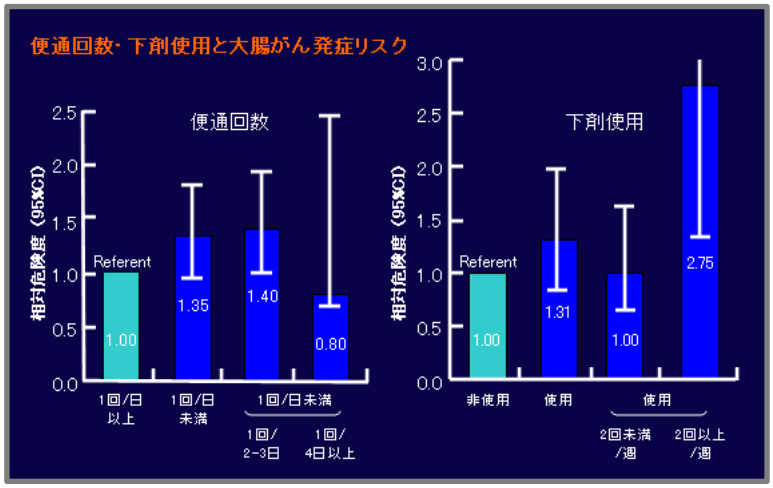
便通回数・下剤使用と大腸がん発症リスクとの関連：宮城県コホート

Constipation, laxative use and risk of colorectal cancer: The Miyagi Cohort Study.
2004 年　European Journal of Cancer 発表

少ない便通回数や下剤使用が大腸がん発症リスクを上昇させる

便秘及び下剤使用が大腸がん発症リスクを増大させている可能性があります。動物実験では、便秘及び下剤使用が大腸の発がんに関与するという知見が示されていました。そして、人間を対象とした症例対照研究においても同様の関連が示されてきました。しかし、前向きコホート研究は少ない現状であり（便秘と大腸がん発症リスクは１件、下剤使用と大腸がん発症リスクは２件）結論が得られていませんでした。これまでの研究の限界として、①便秘・下剤使用と大腸がん発症に関する因果関係が明確化できない点、②便秘や下剤使用と関連する運動、食事等の変数を考慮していない点がありました。本研究では、大規模前向きコホート研究により、便通回数及び下剤使用と大腸がん発症リスクの関連を検討しました。



その結果、便通回数については、１日１回以上の者に比べ、それ未満の者の大腸がん発症リスクは 1.35 であり、統計学的に有意ではありませんが高い大腸がん発症リスクを示しました。また、結腸がん、直腸がん発症リスクに分けて解析した場合、特に直腸がん発症リスクと関連していました。次に、下剤使用については、未使用者に比べ、使用者の大腸がん発症リスクは 1.31 であり、統計学的に有意ではありませんが高い大腸がん発症リスクを示しました。また、結腸がん、直腸がん発症リスクに分けて解析した場合、特に結腸がん発症リスクと関連していました。

研究のデータについて

ベースライン調査：1990 年６月から８月に、宮城県内 14 町村在住の 40-64 歳のすべての住民を対象に、生活習慣に関する自己記入式アンケートを配布し、４万 7605 人から有効回答を得ました。回答率は 92％です。生活習慣に関する調査内容は、病気の既往歴と家族歴、体型、健診受診、女性の出産歴などに関することなどの健康状態、運動習慣、喫煙、飲酒、食事などの生活習慣、職業、婚姻状況、学歴、健康保険加入状況などの社会的な状況から構成されています。
追跡調査：ベースライン時にがんの既往歴を有する者 914 人、便通回数に関する質問への回答に不備のあった者 1840 人、下剤使用に関する質問への回答に不備のあった者 3181 人を分析の対象から外しました。ベースライン調査時から 1997 年 12 月 31 日までの追跡調査で、４万 1670 人の対象者のうち 251 例の大腸がん発症者が確認されました。

便通回数、下剤使用に関する項目

便通回数は、最近１年間の頻度について質問しています。回答項目は、「１日１回以上」「2-3 日に１回」「4-5 日に１回」「６日に１回以下」であり、４つの回答から１つを選択するものです。本研究では、１日１回未満の者を“便秘”と定義しました。

同様に、下剤使用に関しては、「いいえ」「時々飲む」「週に２回以上飲む」であり、３つの回答から１つを選択するものです。本研究では、「時々飲む」及び「週に２回以上飲む」者を“下剤使用者”と定義しました。

研究の特徴と限界について

本研究では、日本人を対象とした前向きコホート研究により、特に便通回数が直腸がん発症リスクを上昇させ、下剤使用が結腸がん発症リスクを上昇させている可能性が示唆されました。
しかし、大腸がん発症者数が小さい点、下剤使用に関してはその下剤の詳しい成分が分からない点の２点が限界として残り、更なる検討が必要です。